

図案デザインの一定サイクルの確認

—デザイナー作品を用いて—

松本 幸子

流行は、約10～20年また最近では、7年ぐらいでも繰り返されると言われている。その中でもそのものの形ではなく、それらに使われている柄デザインについて、繰り返しがあるかを捉えるためにテキスタイル・デザインをテーマし、確認を試みる。現在、様々なテキスタイル作品が世の中に溢れている中で、マイヤ・イソラ氏のけしの花をモチーフにした“unikko”が若者から年配の洋服からバッグ室内のファブリック作品に見られている。今年も日本でマリメッコ展が開かれたところである。そこで今回は、マイヤ・イソラ氏のテキスタイル・デザインの作品を資料に取り上げ柄の繰り返しは見られるのかを確認した結果、一定のサイクルがあることを捉えることができた。このような形は、流行の繰り返しに入ると解釈ができ、研究のてがかりが得られたと考える。

キーワード：デザイン / design 流行 / fashion テキスタイル / Textile
マリメッコ / MARIMEKKO

1. はじめに

流行は、繰り返しされるとよく言われ、現在のファッションでも流行っている、ワイドパンツやスカートなどは、パンタロンとかキュロットスカートとしてあったものを今風にデザインして、名前を変えて、出てきているのが分かる。このような流行のサイクルがあるが、その作品の中の柄デザインに注目し、一人のデザイナーの作品にもサイクルはあるかを確認する。また、流行の繰り返し研究を進めていく一つの参考になることもテーマの一環として、今回は、マイヤ・イソラ氏のテキスタイル デザイン作品を資料として進める事とした。

2. 方法

マイヤ・イソラ氏について、1949年から1987年の38年間のデザイン特徴を分析する。ヘルシンキで開催された「マイヤ・イソラーライフ、アー

ト、マリメッコ」の展覧会のために発行された作品集に掲載されている455作品を資料とし、柄の特徴を捉え傾向を見つけ考察する。

3. 結果

3-1 北歐でのマリメッコ

北歐デザインの象徴とされるほどに忘れてはならないデザインはフィンランドのマリメッコである。1951年に始まり、その信条は『“他とは違うデザイン”』¹⁾が新しさを求める戦後の社会に受け入れられた。

そのデザインの手法は、『ハンドドローイングの微妙なゆがみのあるライン、寂寥感を感じる深い色合い』¹⁾とされている。また、同じように注目されていた、ヴォッコ・エスコリン・ヌルメスニエミのデザインでは、『老客男女を問わず着れる洋服。分かりやすくきれいだと思わせる花柄や、精緻で繊細さを見せつけるような柄とも違う。デザイナーの気持ちが心に響いてくるような魅力を持っている。』¹⁾と言われている。

このように活躍していたデザイナーたちの作品は、北欧の生活の中から生み出されたデザインで、日々の楽しさや寂しさが共存した現実的な生活が一枚のテキスタイル・デザインにあり、その一枚のファブリック作品を飾るだけで、その場を変えることができる、訴求力のある布は類をみない時まで、評価されていた作品を資料とした。

3-2 柄の年代特徴

3-2-1 作品の数

作品の分布を見ると以下の「図1：制作作品の年別数」で、分かるように、活動を始めて最初の約10年間は10点以下の作品又は、作品がない1951・1953・1955年の3年間が見られる。1956年から10点の作品が見られ始めてから1987年までの間は、3年間のブランクを除いてコンスタントに作品活動をしており、1959年1960年1969年は30点もの作品を生み出していることが分かる。

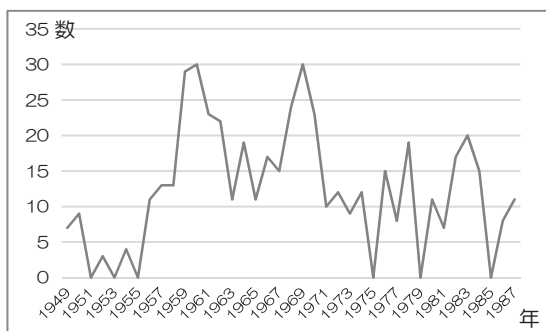


図1 制作作品の年別数

3-2-2 年代別色の特徴

次に年代別の色の特徴を見た結果、1949年から1961年は活動始めた時期であるのかあらゆる色合いとブルー系などの淡色系が多く見られている。1962年から1965年期は明るい色が少々含まれ始めている。1966年から1971年は全体に明るい色合いの作品が多く暖色系が多く見られた。1972年から1974年からはブルー・紺系の暗い色合いが増えてきている傾向である。1976年は、柔らかな色合いと暗い色の約2種の色合いが見られた。1977年から1980年の4年間は、暗い色合いが中心で、その中でもオレンジ系の作品が少し

現れている。1981年から1982年の2年間は、柔らかなパステルカラー系の色が多くなり、淡い色が中心になり、1982年から1984年は、色合いが茶系とブルー系とオレンジと淡い色もまだ残っている作品である。1984年からは赤系の色が多少でてきて、他は茶系とモノトーン系が多くなってきている。最後の2年の1986年は、黒系の色合いが多い中にピンクの作品が見え、最後の年は4・5年前の柔らかい色合いとモノトーンの半々の作品が見られた。

3-2-3 デザインの種類

次に柄の分類を見てみると、以下の「図2：柄の分類の割合」のように、幾何学模様と縦横のラインを合わせるると約41%となる。有名な“unikko”や花などの割合は、14.5%であり、キュウイなどの“Melooni”などの割合は2.0%ととても低い割合になっている。特徴でもある装飾の割合は約10%を示している。

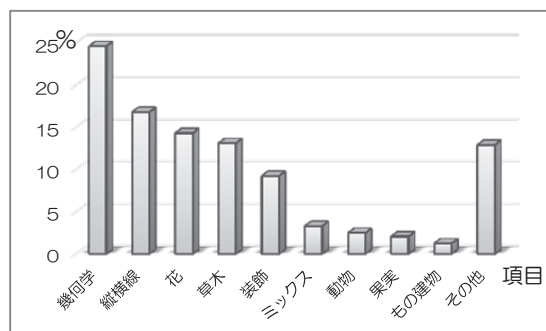


図2 柄の分類の割合

3-2-4 柄の特徴

作品には、いくつかのシリーズものがある。1957年から1963年に、Luontoシリーズがある、乾燥させた草花を適当なサイズのステンシルに載せて、転写する方法で表現した作品である。1959年から1960年には、Omamenttiシリーズがあるこれは、スロバキアのフォークアート（民芸芸術）に興味をもち影響され、デザインしたモチーフを引伸機によってサイズを自在に変えられたもので、特徴は、多彩で豊かな色彩の世界となっている。1961年からは、Joonasのシリーズでとても大型の作品で、150cm幅の10mのペーパー

ロールに絵筆と絵の具によってデザインされたもので、『私は、紙の上に自由にパターンを描いたの。絵筆とダンスを踊っていたのよ』²⁾とされており、スケッチのようにとてもリラックスして作業を行なった作品となっている。1962年には、Barokki シリーズがある、ヨーロッパの古典的な装飾パターンを模したものであり、スケッチを小さく描き、グラフィック・フィルムを使用し、必要な大きさに拡大する方法で、引伸機のカメラの絞りや露出調整や現像時間の変更で仕上がりを自由に変えることができる手法を習得し作品制作を行なったものである。1963年は、Arkkitehti シリーズがありテーマは、力強い広くオープンな公共空間の装飾として使えることを目指して作られた作品シリーズであった。次の年1964年に有名な“Unikko”の作品がある、この年に花のファブリックシリーズをデザインしている。マリメッコの創設者のアルミ・ラティアが『ファブリックにはバラなどの花を決して使ってはいけない。なぜなら、花は自然のままでもとても美しいので、装飾モチーフとして使った時に同等の美しさを表現することは不可能だからと』²⁾公共の場で常に主張していたにもかかわらず、マイヤの作品にこの有名なけしの花の“Unikko”があり他にたくさんの花の作品が作られている。他にも1965年から1967年の太陽と海のテーマシリーズ、光の現象と、空と雲、太陽の残像を色により組合せ円形や楕円形の構図が多く見られるもので、1967年のPeliシリーズは、ゲーム盤を正確にかつ慎重に再現し描かれている、1968年のLhminenは、人間の部分を撮影しそこからパターンを作り出した作品、1969年の宇宙的スペースとも言えるAvaruusシリーズなどは、宇宙探検から影響を受けた壮大なデザインになっている。

このように様々なシリーズものもあるが、これらも参考にデザインの出現の整理を行った結果、まず自然の草木の転写の作品を見てみると、1957年から1959年に多く見られていたものが1962・1963年そして、1971年さらに1979年最後に1987年に又出現している。動物のモチーフは1950年から1959年の間に多く見られ、次に1969年から1970年に再出し、1976年・1978年とみら

れる形となっている。他にも果物類は1950を始めに次には、1963年から1973年の間に定期的に見られる形であった。有名な花モチーフは、1950年より1982年の間に見られ、1966年から1973年間は毎年見られる形となっていた。

このようにモチーフの出現状況を見てみると、転写による草木モチーフの場合は、1957、59年から1962、63年は4・5年ごとであるが、1963年から1987年の間は8年ごとに同じ系列の柄が定期的に見られる結果となり、一定のサイクルが見られる形となった。

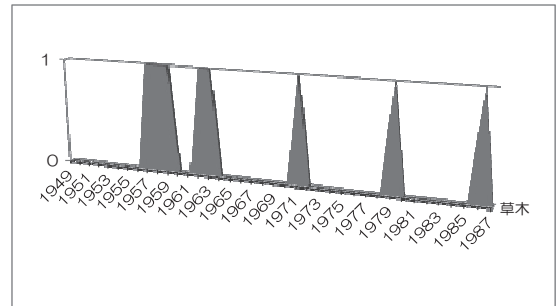


図3 草木モチーフの出現の形

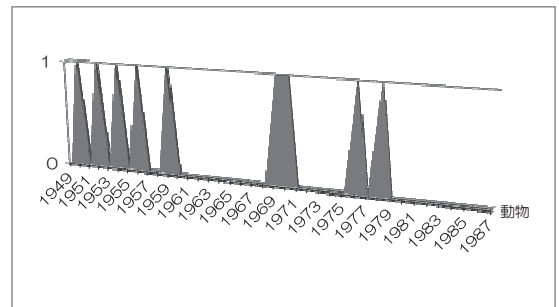


図4 動物モチーフの出現の形

動物のモチーフは、最初の10年間は、2年毎に柄が出現しており、ある程度のサイクルが見られ、果実モチーフも中間地点位の位置である程度のサイクルで出現した形をとっているが、あまりに短いサイクルであった。有名な花のモチーフについては、常に使われる割合が多いのか、出現割合も多く、38年間活躍したうちの23年間に表れている。

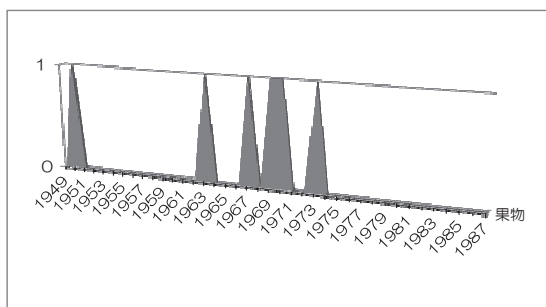


図5 果実モチーフの出現の形

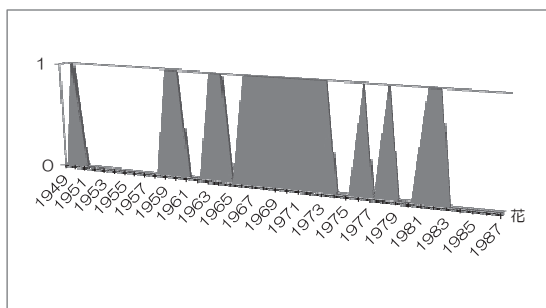


図6 花モチーフの出現の形

4. 考察

このように柄にも一定のサイクルがあるかどうかを確認するために始めた資料整理であるが、一部もしくは、種類のモチーフデザインには、繰り返していることが確認できた。それらのデザインは、その時代に合ったものを加えたり、単純化されたりと、再検討され繰り返して出現していると考えられる。この出現は、流行の繰り返しと同じように一人の作品の中の柄にも一部ではあるがみられたと言える。このような形は、大きなくくりで、流行の繰り返しに入ると解釈した。

伝統的な柄などは、このようなサイクルを見つける事は、困難ではないかと思案していたが、少しではあるが、一人のデザイナーのデザインにもサイクルがみられたことにより、これらの結果を元に和柄にも流行の繰り返しサイクルがあるかを探ることを行っていく、手掛かりが得られたと考える。

5. まとめ

最後に、テキスタイル・デザインは、ただのテキスタイルとは違い、織物や織物の原料だけでは

なくなり、その範囲は大きく広がっており、織物 (textile fabrics)、織物用繊維 (textile fiber)、織物工芸 (textile art)、織物工業 (textile industry) の中の工業デザインの中に入るプリントデザインの柄を取り上げ、流行の繰り返しがつかめるかを確認したが、結果的に服飾の中の一つの分野である事から、繰り返しの傾向はみられることが得られた。スタイルより、つかみにくい柄の変化を捉えることも可能であることが、確認できたと考える。

しかし、反省点として、やはり38年間という年数は、流行のサイクルが短くなってきたとはいえ、年数的に断定するには不足であることも明らかとなった。

これらの経験を活かして、日本の伝統衣装である和柄の流行に取り組みたいと考えている。

6. 参考文献

- 1) 高橋かおる、市川ゆかり、川村・バルムネン博士：『マイヤ・イソラーマリメッコのテキスタイル・デザイン』三芳伸吾、ピエ・ブックス (2006)
- 2) Kristina Isola Emma Isola：『Maija Isola—マリメッコを輝かせた、伝説のデザイナー—』パイ インターナショナル (2012)
- 3) 渡部千春：『Scandinavian Design2』プチグラパブリッシング (2006)
- 4) 渡部千春：『Scandinavian Design3』プチグラパブリッシング (2004)
- 5) Marianne Aav (マリアンネ・アーヴ) フィンランド・デザイン美術館館長 / 訳 和田侑子：『マリメッコのすべて』(2013)
- 6) 萩島崇：『フィンランド語辞典』大学書材 (1997)
- 7) 大沼淳：『服装大百科事典 上巻、下巻』文化服装学院出版局 (1969)

7. 引用文献

- 1) 渡部千春：『Scandinavian Design3』プチグラパブリッシング P9 (2004)
- 2) 高橋かおる、市川ゆかり、川村・バルムネン博士：『マイヤ・イソラーマリメッコのテキスタイル・デザイン』三芳伸吾、ピエ・ブックス P44、P58 (2006)

(受付 2017.3.28 受理 2017.6.19)